六朝における経疏分科法についての一考察

青　木　孝　彰

一

中国の仏家は、経典を解釈する場合、つねに、その文段を科判する科文立てを行つた。このような解釈法は、分科の形式の整美を追うあまり、細密に過ぎて煩瑣を極め、かえつて経の正意を把捉することを妨げることもあり、また、このような解釈の方法が、もとの文献が述べようとしている意味を、正確に汲み取ることになつているか否か問題もあるものの、とにかくこの分科法は、教判の建立と共に、中国における仏典研究の大きな特色といえる。そして、経典の解釈は、とりもなおさず、教理の形成と密接につながるのであるから、科文法による解釈法は、中国仏教思想の成立と展開に、大きな役割りを演じているものでもある。このような解釈法が、いつ頃、どのような経緯のもとに生れて来たものか、すなわち、経疏分科法の成立の歴史的背景について、考察を試みたい。(1)

科文法には、種々の形態や方法があるが、最も代表的なものは、序・正・流通の三分法であり、それは、道安の創作になる、というのが古来の通説である。(2)

すなわち、吉蔵は仁王般若経疏巻上にて「次入二経文一。然諸仏説レ経、本無二章段一。始自二道安法師一、分レ経以為レ三段一。第一序説、第二正説、第三流通也。」として、道安が三分法の創始者であるとし、また、湛然も法華文句記にて、「昔有二晋朝道安法師一、科二判諸経一、以為二三分一。序文正宗流通分。」と記している。他にも、天台智顗(3)、青竜寺良賁(4)、圭峯宗密(5)等が、同様の記述をしており、更には、賛寧も大宋僧史略にて「分科して注釈した始めは道安か」と述べている。

しかしながら、これらの諸記録はかなり後のものであり、にわかには首肯しがたい。すなわち、現存する道安の注釈である人本欲生経注には、全く、分科が見られないのである。道安の経典解釈の態度について、出三蔵記集や高僧伝が伝えるところによれば、それ以前の注釈が「ただ大意を叙べて転

読するのみ」であつたのに対して、道安は諸の経を注釈して「文を尋ね句を比べて起尽の義を為し、疑を拆いて甄解した。」として、「文理会通し、経の義の克明なるは、安より始まる。」と記されている。(6)

このことから、それ以前の経典解釈が粗略であつたのに対し、道安が正確で克明な注釈を為したことは窺える。また、ここでいう「起尽」とは、当時の文献上の用語例から見て、経の終始とか、経典の組織構成、というほどの意味のようであり、道安は光讃般若に「起尽解一巻」を作つた、ということなどからして、彼が、ただ字句を逐つての解釈だけでなく、一経全体の組織構成を解明する、という点に着目したらしいことは知られる。けれども、以上の資料から彼を三分法の創始者と決定するのは、無理があるように思える。先の吉蔵等の記述は、隋・唐代に、道安を三分法の創始者とする伝統が存在していた、ということを示すものであろうか。

二

分科法の成立の模様について考察するには、先ず、現存する注釈書類の検討が必要である。すなわち、呉陳慧の陰持入経の注、道安の人本欲生経注、僧肇等の注維摩詰経、僧肇の金剛経注等を見るに、いずれも文句を逐つての注釈であつて、科段は全く見られない。

これらに次いで古い注釈は、道生の法華経疏であるが、これは冒頭、経題の解釈等につづいて「此経所レ明、凡有二三段一。始於二序品一、訖二安楽行一、此十三品、明二三因為二一因一。従二踊出一至二于嘱累品一、此八品、弁二三果一。従二薬王一終二於普賢一、此六品、均三人為二一人一。」の如く大科について述べており、すなわち、一経を三分しているが、それは、三乗は全て一乗の真実に帰する、という骨子を、因・果・人の三方面より見た、という内容からの分科で、序・正・流通の三分別とは観点が異る。しかし、安楽行品をそれ以前の経説の「流布」の役目を説いたものと見たり、涌出品を寿量品の「序」と見たり、薬王品で「経既竟、今明二流通之人一」と述べたりして、部分的に序と流通について考えていることが知られる。

次に古い注である法雲の法華義記を見るに、「今一家所習、言経無二大小一。例為二三段一。三段者、第一詔為レ序也。第二称為二正説一。第三呼曰二流通一。然今三重開二科段一。」として、明らかに序・正・流通の三分がなされ、更にそれが二重三重に細分され、いわゆる、三・六・二十四段の三重の分科がなされ、ここに分科法は極めて巧妙に整備され、これ以後は、浄影寺慧遠、智顗、吉蔵等の代表的注釈家をはじめ、殆どの場合、少くとも形式的には同様の分科を行つている。

すなわち、直接資料たる現存の注釈書について見れば、道生疏にて始めて科文法が見られ、法雲の義記に至つて、その

形式は整備されていることが知られる。

三

次に、六朝期の学人達の経典の解釈法について、後の文献が記録するところを検策すれば、智顗の維摩経文疏巻一[7]、法華文句巻一[8]、灌頂撰湛然再治の大般涅槃経会疏巻一[9]、吉蔵の法華義疏巻一[10]、法華玄論巻一[11]、金剛経疏巻一[12]、等に於て、九轍法師といわれた道融、竺道生、法華経を五門に分つた河西道朗、「経文を節目」した江東の法瑤、法華経を序正流通に三分した廬山の慧竜、三門に開いた玄暢、そして光宅法雲、四段分別した僧印、二門六段に分科した竜光寺僧綽、更には、開善寺智蔵、荘厳寺僧旻等の学人の名が挙げられ、それぞれ科文づけによる注釈を行つたことを伝えている。これらの学人の年代を見れば、道融、道朗、法瑤、慧竜、玄暢、僧印等は道生より法雲に至る間にあり、智蔵、僧旻は、法雲と同時代である。

なおまたこれらの記録よりすれば、諸家の分科の方法はさまざまであつて、隋ごろより以後には分科の形式がほぼ定つていることと較べて、この期は未だ注釈の型が定らず、ようやく、分科法が行われ始め、工夫され出したことを窺わせる。

さらにまた、僧伝の記録によれば、「初華厳大部、文旨浩博、終古以来、未レ有二宣釈一。暢乃竭レ思、研尋、提レ章比レ句。伝講迄レ今、暢其始也。」と伝えられる玄暢、「善二大乗一明二数論一。講説相続、学徒甚盛。区二別義類一、始為二章段一焉。」と記される道慧、さらに、法華義疏三巻や門訓義序三十三科を製した慧基[13]、涅槃経集解の編者である宝亮[14]、そして智称[15]等が、科段を設けて経典を解釈したらしいことを伝えており、特に、玄暢と道慧は、その「始め」であると記されている。なお、これらは、いずれも宋・斉代の僧である。

すなわち、これらの諸記録よりして、道生から法雲に至る約百年の間に、分科法は盛んに創作され、工夫され、次第に巧妙になり、詳細を究めるようになつて来たようである。

四

分科法が工夫され始めた時期と、それを行つた学人たちは、概ね以上の如くであるが、このような経典解釈の方法が生み出されて来た背景については、今、にわかには論じ尽くされない。経典は、はじめにイントロダクションとしての序品を述べ、末尾に、後人に付嘱を託する嘱累品の類が置かれて、その中間の部分で経の正意を述べる、という構成のものが少くないから、もともと経典自体の中に、三分的要因がある場合もあり、また、大部の経の中から、その経の真意を探究し宗要を抽出しようとする要求より、分析的解釈が促され

ることもあり得る。また、経の文句はすべて仏陀の教説であるから、一言一句あますところなく、全て重要な意味を表現している筈であるとして、すべての章句に意味づけをし、構成上の地位を明らかにしようとすることから科段を設けたこともあろう。すなわち、分科法の成立には、さまざまな原因が関わり合つていると思える。

そして、ここでなお考えねばならぬのは、講経との関連である。すなわち、経典の注釈書は、殆どの場合、講経の草案や記録を整理して製作されているからである。前述の僧印は、法華経を講ずること二百五十二遍であり、宝亮が大涅槃八十四遍、勝鬘四十二遍、維摩二十遍他を講じた等々、講師は同一経典を数十数百回と講じ、また、大部の経典は数回に別つて講じられたであろうから、そこから、経の適当な分段の必要が生じ、その方法についての工夫がなされ、その巧妙さに盛んに注意が向けられるようになつたであろうことは、充分に考えられる。

さらにまた、右のような講経者の心理的配慮とは別に、講経の形式と分科法との関係を考察せねばならない。それは、唐代の講経の場において、講師が経を三門分別することがあり[16]、この形式は六朝期前半に遡れるようであつて、それは、高僧伝の経師篇に記録される経師や唱導師たちの、転経や作梵と関りがあるように思えるからである。六朝の士大夫の経書の解釈法と、仏家のそれとの関連などと共に、別に改めて考えたい。

1　この問題に関して、横超慧日博士に、前に御論攷がある。（「経釈史考」支那仏教史学・一―一）。

2　宇井博士「道安研究」、湯用彤教授「漢魏両晋南北朝仏教史」は、道安説を認めておられるようである。

3　仁王護国般若経疏巻一。正・三三・二五五d。

4　仁王護国般若波羅蜜多経疏巻上。正・三三・四三五d。

5　盂蘭盆経疏巻上。正・三九・五〇七a。

6　高僧伝。正・五〇・三五二a。

7　卍続・一・二七・五・四三一右。

8　正・三四・一a～二a。

9　卍続・一・五六・四・三四一左。

10　正・三四・四五二c。

11　正・三四・三六三c。

12　卍続・一・三八・三・二二六左。

13　高僧伝。正・五〇・三七九a。

14　高僧伝。正・五〇・三八一c。

15　高僧伝。正・五〇・四〇三b。

16　入唐求法巡礼行記巻第三。会昌元年。